

俳句

茶の花

朝の月陶の白さよ花辛夷

佐保姫の衣擦れ露地に微風沸き

ポン菓子爆ぜて花見の客も飛び

うすものを衣桁に掛けて逢う日待つ

螢火の沈みて夜霧深まりぬ

飛んだのか鷺草いつか絶えており

湯本明子

越後の香秘めし新蕎麦届きけり

釣瓶落し鍵穴さぐる旅帰り

貸す約の本探しをりちちろ鳴く

昔住みし街に湯屋あり冬銀河

曾孫への試歩の靴買う春隣

疲れたる目に茶の花の夕あかり